

令和5年度 ICTを活用した授業改善推進校報告書 藤の木小学校

1 学校の課題

- ・藤の木小学校の課題として、課題設定と、問いに迫る手立て、情報活用を授業の中で生かすきれないことが挙げられる。さらに読解力や書く力などの基礎的な学力も低い傾向にある。
- ・令和4年度全国学力・学習状況調査の正答率 ※（）内は全国平均正答率
【国語】62% (65.6%) 【算数】61% (63.2%) 【理科】64% (63.3%)
- ・CRTテスト（国語のみ） ※全国比 %
【1年】91 【2年】88 【3年】76 【4年】89 【5年】101 【6年】94
- ・情報活用能力調査（P+テスト）正解率 %
【6年】情報モラル 72 プログラミング能力 61.6 情報活用能力 71.2
【5年】情報モラル 68.6 プログラミング能力 54.2 情報活用能力 67.7
- ・スタンダードチェック（本校作成の学習等に関するアンケート）
「ノートやタブレット端末を活用してしっかり学習する」の項目に関しては、低学年で95%、高学年で94%の児童が肯定的に答えた。

2 研究主題

主体的・対話的で深い学びに向かう子供の育成
－効果的なクラウド活用と、見方・考え方を働かせた授業を通して－（二年次）

3 取組内容

(I) 日々の授業改善—問題解決・探究における情報活用に関するマネジメント

① 「かく活動」を位置付けた探究の学習過程モデル

日々の授業を、探究の学習過程（課題設定—情報収集—整理・分析—まとめ・表現）モデルに沿って行う。（図1）

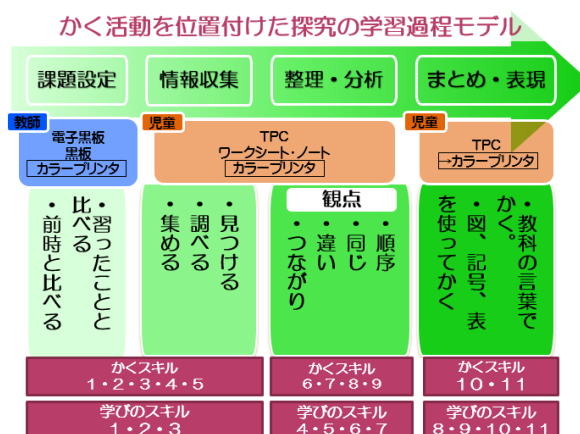


図1 情報活用能力育成のためのかく活動を位置付けた探究の学習過程モデル

② 各教科の見方・考え方を働かせた単元を貫くパフォーマンス課題の設定

教科に必要な見方・考え方を育むために、単元を貫くパフォーマンス課題を設定した単元構成を行う。パフォーマンス課題とは、様々な知識やスキルを応用・総合して活用することを求める課題である。1時間だけでなく単元を貫いて設定することで、より深い学びとなると考える。(図2)

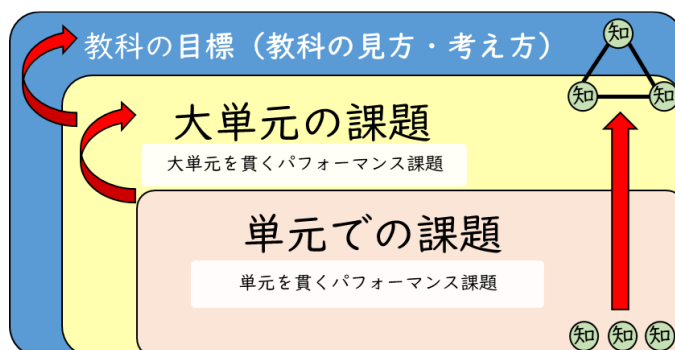


図2 単元を貫くパフォーマンス課題の目指すイメージ

③ 情報活用スキルとしての「身につけよう かくスキル11」

「情報を得たり、情報を整理・分析したり、得られた情報を分かりやすく発信・伝達」するためのスキルを高める。(図3)

(2) ICT機器活用に関するマネジメント

① 教師の指導の道具としてのICT機器活用

教師は、授業中は、電子黒板・実物投影機・デジタル教科書を、「大きく映す」「手もとと同じものを見せる」などの基本的な活用を着実にを行い、よく分かる授業づくりに取り組む。

② 児童の学習の道具としてのICT機器活用

情報教育全体計画に基づいて、総合的な学習の時間では必ずタブレット端末を使うこととし、タイピング練習の時間も確保する。

(3) 情報活用能力育成のための教育課程編成—情報教育全体計画

① 基本的な操作、情報モラル・情報セキュリティに関するマネジメント

「ICT活用年間指導計画」「情報モラル年間指導計画」に沿って指導を行う。

② プログラミングに関するマネジメント

プログラミング的思考を育むことができるような教材開発を行い、各学年においてプログラミング学習を行う。

(4) 研究体制に関するマネジメント

① 全教員1公開授業の実施

授業力の向上を目指して、全教員が基本的に1公開授業を行う。

② 研究グループでの活動

2つの研究グループを作り、それぞれが学習指導案検討を行い、模擬授業は教員全員で行う。→ 研究授業と協議会は各グループで行う。

③ 協議会等の内容の共有

各グループでの協議会の内容の報告会を行い、共有する。また、記録をクラウドにあげて、いつでも見られるようにする。

図3 身につけよう
かくスキル11

4 検証結果

- ・令和5年度全国学力・学習状況調査の正答率（昨年度との比較）
 【国語】 68%（↑6ポイント） 【算数】 54%（↓7ポイント）
- ・CRTテスト（国語のみ） ※全国比 %
 【1年】 90 【2年】 93 【3年】 76 【4年】 94 【5年】 93 【6年】 99
- ・情報活用能力調査【6年】（P+テスト）正解率% （）内は前年度同一集団との比較
 情報モラル73.3（+4.7） プログラミング能力65.3（+11.1） 情報活用能力69.1（+1.4）
- ・スタンダードチェックシート（本校作成の学習等に関するアンケート） ※（）内は昨年度との比較
 「ノートやタブレット端末を活用してしっかり学習する」の項目に関しては、低学年で93%（-2）、高学年90%（-4）の児童が肯定的に答えた。

5 研究成果

（○：成果 ●：課題）

- 全国学力・学習状況調査の国語の正答率が昨年度より向上した。国語における書く力が向上していることが分かった。
- 全教員1公開授業は昨年度も行ったが、さらに公開授業者と同じフルの指導案を作成し、管理職及び研究主任が事前に読んで深めるようにした。これによって一つの授業の中で、ICT機器を活用する必然性についても共通理解ができ、大変有意義であった。公開研、校内研では、模擬授業を経て、研究授業を行うことができ、授業力の向上に資した。
- 今年度も校内ミニ研修を行い、Google for Educationやミライシードの職員研修を行った。さらにミニ研修の内容の希望をとり、職員のニーズに合わせて学びを深められるようにしていった。CanvaやKahoot!など、新しいICT教材の活用方法も共有した。
- 昨年度までの課題であった、教科におけるICT機器の活用のばらつきに関しても、意識的に取り組むことができ、活用の幅を広げることができた。
- 授業の中でかくスキルを活用する場面をきちんと設定できている。かくこと（打つこと）は学びの基本であるという観点からも、児童の力が付く実践を進められている。
- 具体的にどのような場面で活用が可能なのか、クラスルームのアーカイブを行うことで、必要な情報を取り出し、年度をまたいで活用することができた。また、iPad活用表を作成し、年度のスタートの際の指標となるような活用を目指している。
- 高学年よりタブレット端末を持ち帰り、家庭学習で活用した。宿題の内容は、テストで正答率の低かった問題をドキュメントシートやオクリンクに書き出して、再挑戦させたり、音読を録画させたり、自主学習のテーマを決めて、調べ学習をさせたり、スライドなどの成果物を仕上げたり、様々な形式で行った。これによって、未提出者の確認、声かけもしやすく、専科であっても担任と相談しながら家庭学習の課題を出すことができた。
- 委員会活動でもclassroomを活用したことで、児童が作成した資料は年度を越えて閲覧・編集・活用できるようになっている。児童同士の引き継ぎをスムーズに行うことができるとともに、授業で身に付けた技術を活用して資料を作成する姿が見られている。
- 複数のタイピングアプリ選択できるようにしたことで、自分の興味関心に合わせて、何度も取り組む姿が見られた。

○ 理科の学習を中心に、児童が自身で課題を設定し自分たちのペースで実験を行う授業を実践した。児童同士が自由なタイミングで話し合ったり協働したりする姿が見られ、主体的に粘り強く取り組んでいる様子が見られた。



● クラウドの活用の仕方に教員間で差がみられる。より意味のあるクラウドの活用方法について、意識を高める必要がある。

● パフォーマンス課題については本校では約4年間取り組んできたが、形骸化してしまっている部分もある。改めてその内容・意義について、検討する必要がある

● 全国学力・学習状況調査の算数の正答率が昨年度より低下した。算数での思考力や表現力での苦手意識の払拭ができておらず、課題が残った。基礎的な問題理解にも課題があると分析した。

● 本校では情報収集・整理分析・まとめ表現というスキルを活用した授業実践を進めている。45分間の授業だけでなく、単元を通してこのスキルを使っていくという意識の共有がしきれなかった。

● 多くの学年がCRTテストにおいて、全国平均に迫る到達率ではあったが、全国平均を超える学年はなく、全体的に見て、やや学力が低いという結果になった。特に3年生は昨年度も低く、問題用紙と解答用紙が分かれるタイプに困惑していることも考えられる、十分に分析して、来年度の対策を行う。

● 児童が学習の内容や方法を自己決定できる場面を設定した学習方法は、取り組み始めたばかりで、校内で共通認識を持つことにはまだ時間がかかる。

● P+テストの結果から、6年生は5年時に行った結果よりも全ての項目で数値が向上した。情報の表現などは日常の授業の中での指導の積み重ねが大切である。情報の整理では、算数科や社会科におけるグラフの活用の際に、内容を読み取ることができるよう意識的に指導をしていく。さらに、プログラミング操作に関しては、タイピング練習同様に隙間時間も活用して、引き続き取り組むことができるようにする。

